

〈インタビュー〉

写真・取材・構成：細谷祥央、飯沢未央

～思わず人を笑わせて、考えさせるイグ・ノーベル賞のしかけを探る～

学問をわかりやすく、役に立つかどうかを “伝えない”理由



Figure 1. 立教大学の古澤輝由特任准教授。通称“イグおじさん”。

イグ・ノーベル賞が発表される秋は、普段は科学雑誌などを読まない会社の同僚や、勉強嫌いの学生、理系には縁のなかった実家の親まで、面白がって学問の話を始める人が増える季節だ。学問を面白がる一つのカルチャーとして世界的な話題性を持つ、イグ・ノーベル賞の仕組みについて何うべく、イグ・ノーベル賞のファンを公言し、運営サポートなども行うサイエンスコミュニケーターであり立教大学理学部 SCOLA 特任准教授の古澤輝由さん（通称“イグおじさん”）に話をうかがった。

コンセプトは「思わず笑わせて、考えさせる」

—日本で一般的に科学の研究や業績が取り上げられて、広く話題にのぼるといったら、ノーベル賞 [1] とイグ・ノーベル賞 [2] が挙げられます。イグ・ノーベル賞は、サイエンスを楽しみ、考えるというある種のカルチャーだと思います。古澤さんはどのように捉えていますか？

イグ・ノーベル賞は「思わず人を笑わせて、考えさせる研究や業績に与えられる賞」です。この中核さえクリアしていれば賞の対象になります。だから、学問的に考えさせられる賞もありますし、学問ではない全く別の文脈で、なにかおかしくないかこれ!? と考えさせる賞もあります。具体的にどう考えてほしいのか、笑ってほしいのかを、主催者側は特に定めていません。主

催者側として、なんらかのこだわりはあるけれど、そのこだわりを押し付けない。逆にいうと、どのように考えて、笑えるかについては、相手に委ねられているんです。もちろん委ねているということも、主催者側は言いません。けれども実際には、思わず笑って考えるようにデザインされています。それが、僕がコンセプトを日本語に訳し発信する時に必ず、「思わず」という言葉を添えている理由なんですよ。

—まさに、「思わず」ですね。そして、こちらの受け取り方を指定しないということですね。表彰される側である研究者にとっては、イグ・ノーベル賞はどのような位置付けの賞なのでしょうか？

研究者にとっても、イグ・ノーベル賞は狙って取る賞ではありません。それこそ、「思わず」受賞する賞だと思います。当人にとって、研究はいたって当然に大真面目なわけです。しかし時には、研究のアプローチや結果が、ある視点から見た時に笑えることもあるでしょう。イグ・ノーベル賞は、ただ笑えるという形でピックアップして茶化す賞ではないんです。笑いに加え、もう一步踏み込んだ視点を提供することで、「あっ、確かに不思議だ」と考えさせる賞だと思います。ただ、賞の対象となるのはあくまで「研究や業績」なので、必ずしも科学研究によるものではない。科学研究は多いですけどね。

—なるほど、単純なノーベル賞の反対ではない、ユニークな立ち位置ですね。

そう、全然違います。僕がイグ・ノーベル賞

の話をするときに、常に気をつけていることがあります。イグ・ノーベル賞はダメな研究に与えられる賞だったり、くだらない、馬鹿な研究に与えられる賞だという理解がされないように気を払うようにしています。アカデミー賞 [3] に対するラジー賞 [4] のような、要するにダメなものに与えられる賞の科学版なんですよ、という捉え方は大きく違うんですね。ただ、近年はメディアでの取り上げられ方も変わってきて、そういう誤解が徐々に減ってきたように感じています。



Figure 2. 古澤さんの、イグな本棚。何だコリャ？と手に取りたくなる。

—賞が生まれた経緯を教えてください。

創設者のマーク・エイブラハムズさん [5] に、なぜイグ・ノーベル賞を作ったのか？と質問したら、「一番優れた研究や業績を讃える賞はあるし、なんなら一番よくない研究や業績を讃える賞もある。もっと他の基準で選ばれる賞もあっていいじゃないか」と。マークは科学系の編集者として仕事をする中で、もっと多くの人々に知られていいような、面白い研究がたくさんあることを知っていたんですね。

イグ・ノーベル賞のベースにあるのは、サイエンスをカルチャーとして広げていくことだろうと感じています。その上で、現状何が障壁となっているかという、学問への敷居の高さと権威性がある。これをどうはずしていくのが難しい。

この上で発明されたのが、イグ・ノーベル賞の中核をなす「思わず笑わせて考えさせる」というコンセプトや、徹底的に脱権威化した授賞式なんです。僕がいうのもなんなんですが、サイエンスのカルチャー化という観点でイグ・ノーベル賞が成し遂げたことかというと、「思わず笑わせて考えさせる」というコンセプトが発明されたことが最も大きいのではないかと考えています。

—権威性とは全くちがうところで、研究や業績に焦点をあてられるコンセプトなんですね。

イグ・ノーベル賞は、サイエンスや学問の権威的な側面に対して、ある種のアンチテーゼを示すような、反権威主義的なスタンスを持っている。かつての『モンティ・パイソン (Monty Python)』[6]からの流れをすごく意識していると感じます。イグ・ノーベル賞の授賞式は一見ものすごくフォーマルなんです。でも、どこか抜けているとか、おかしく感じられる演出が施されています。

主催者のマークは燕尾服を身にまとい、ハットをきちんと被っているんですが、それがどうもぼろぼろなんですよ。演出として、意識的にぼろぼろのハットを被っているんです。被っているのはシャポークラックと呼ばれる、折り畳みができるフォーマルなシルクハットです。シャポークラックは、旅行中や出先でもシルクハットを被るという、当時の英国紳士の嗜みのための帽子だったんです。マークは、アンティークなスタイルなんだけれども、ぼろぼろなシャポークラックを被り授賞式を執り行います。こういった演出のひとつひとつが、学問の権威性を時に皮肉をこめて崩すのに効いています。



Figure 3. 授賞式が行われるハーバード大学サンダースシアター [7]。

高度にデザインされた審査基準

—「思わず笑わせて考えさせる研究や業績」の選び方について、深掘って聞いてみたいです。初期の受賞歴を見てみると、排泄物と生殖器に関する受賞が多く、小学生男子がツボにはいるような笑いが多いなと思いました (笑)。

そうですね。例えば、1993年度の生物学賞は、『“Salmonella excretion in joy-riding pigs.” (暴走する豚のサルモネラ菌の排泄) という先駆的な研究に対して』[8]というものでした。ほか、同年の医学賞『痛々しくも入念なる研究報告 “Acute management of the zipper-entrapped penis.” (ジッパーに挟まれたペニスの急性管理) に対して』[9] など、ご指摘の通り、創設当初からいわゆる下ネタは多いです (笑)。

—近年の受賞歴を見てみると、どこか人間の社会課題との繋がりを感じさせる受賞も見受けられますね。

例えば、2017年度の生物学賞は、『洞窟に棲む、雌がペニス、雄がヴァギナを持つ昆虫を発見したことに対して』[10]は、ジェンダーが社

会的な議題とされている現状を想起させます。「あれ? オスとメスってなんなんだろう?」と思わず考えてしまいますよね。

賞の選ばれ方は、全体を踏まえてキュレーションされて、年々変化してきているように思います。実は過去には、“思わず笑わせて、考えさせる研究や業績に与えられる”という審査基準に並行してもう一つ別の基準もあったんです。“決して真似できない、または真似すべきではない”という基準です。

しかし、近年はこの基準についてあまり触れられていません。ネガティブな側面を持つ要素が増えて、賞のイメージが変わっていつてしまうことを避けるためでしょうか。

以前、北海道大学で開催したイグ・ノーベル賞の講演 [11] の際に、マーク本人から聞いて、とてもびっくりしたんですが、いわゆる下ネタといわれるセクシャルな笑いや、排泄物から笑いを誘うものだったり、彼らは“below the belt”と表現していました。慣例では「卑怯な手段」を意味しますが、この場合は「ベルトの下」つまり「下ネタ」も意味します。

いつからかは定かではないですが、“below the belt”な受賞は、全体に対して2~3割を超えてはいけなと決めたそうです。“below the belt”は、人々にイグ・ノーベル賞を面白いと思ってもらうためにむしろ大事な要素なんですよ。必要な要素なんだけれども、“below the belt”が一定の割合を超えてくると、賞の主旨が変わってしまう。だから、一定の線引きをしているとのことでした。公言しているわけではないんですがね。僕自身、そういうお話を聞くにつれて「かなり高度にデザインされているんだな」と感じるようになりましたね。

研究論文のコピーライティング力

—「思わず笑わせて考えさせる」というコンセプトを体現するため、どのように研究や業績を選ぶかのルールが考え抜かれているんですね。

ええ。でもコンセプトだけだったら、ここまで広がらなかったと思うんですね。イグ・ノーベル賞が広がっていった理由は、それぞれの賞のキャッチコピーとして機能する「受賞理由」にあると思います。

—コンセプトを基点に選考を経て選ばれた研究や業績を、どのように受賞結果をコピーライティングするかが、優れていたということでしょうか。

たとえば、2022年のイグ・ノーベル生物学賞の受賞研究にあたる原著論文では『Short- and long-term effects of an extreme case of autotomy: does “tail” loss and subsequent constipation decrease the locomotor performance of male and female scorpions? (極端な自切の短期・長期効果について: 「尾」の喪失とそれに伴う便秘は、オスとメスのサソリの運動能力を低下させるか?)』 [12, 13, 14] というアカデミックなタイトルがつけられています。論文ではサソリが尾を失った際に、排泄や交尾、逃亡行動がどうなるかについての研究が報告されています。

このサソリの生物学的な論文が、イグ・ノーベル生物学賞としてどのような受賞理由が与えられているかということ、『便秘がサソリの交配に影響を与えるかどうか、またどのように影響するかの研究に対して』 [15] でした。英語で読むと顕

著なのですが、もってまわった言い回しがされたり、いわゆるアメリカンジョーク的な見出しがつけられたりしています。原著論文の主題を崩しつつも、受賞研究の何がおもしろいのか抽出されていて、場合によっては論文を読まなくとも、なんとなく伝わるように翻訳されているおかげで、なんでそんなことをしたんだ（笑）、という話を誰もができるわけです。そしてそこで興味を持って論文を読む人もいるかもしれない。

—翻訳するには、まずは伝える側が、いったいどんなことをやっているのかを見極める必要がありますよね。イグ・ノーベル賞の選定委員会は見極める力がすごい。

受賞理由を執筆しているのは、マーク本人です。もう年齢も七十歳に近いというのに、いつ寝てるんだろうかと周りが思うほど、めちゃくちゃ働く人です。彼は、『Annals of Improbable Research』[16] という雑誌を出版しています。彼がファウンダーとなって、イグ・ノーベル賞を主催しているんです。彼は研究者ではないけれど、ハーバード大学で数学を専門に卒業しています。イグ・ノーベル賞の受賞理由や授賞式の流れだけではなく、授賞式で披露されるオペラの原稿まで彼が手がけています。イグ・ノーベル賞が今日のように広まっていったのは、賞を選ぶセンスだけではなくて、内容の面白さを伝え表現するセンスが秀逸だったことも大きいんじゃないかなと思いますよ。

伝えたいことと、実際に伝わることを超えて

—受賞理由が、原著論文の意義をガッツリと



Figure 4. サソリの便秘について、考え込む古澤さん。

説明するものではなかったり、授賞式の反権威主義的な演出だったり、イグ・ノーベル賞全体に、抜けのようなものを感じますね。抜け感は、あまりアカデミアの世界からは感じられないような気がします。

そうですね、あそびの部分と言えるかもしれませんが、送り手が決めすぎずに、受け手が楽しめる余地が残されている。マークは、受賞理由に対してそんなバカなと思い、どこが面白いのかを踏み込んでいく人がいたらベストだと考えているでしょう。しかし、踏み込んでいなくとも、そういった研究をしている人が世の中にいるんだなとわかったら、それはそれでサイエンスに理解がある人のパイが広がっていく。やはり、サイエンスが市民権を得ていくという意味で、イグ・ノーベル賞の存在は一つの有効な手段だと考えています。

ノーベル賞の研究はとてつもなくすごいけれど、学術的なすごさをわかりやすく説明しようとしても、正直難しい（笑）。もちろん、わかるわからないの話ではないですが、イグ・ノーベル賞の立ち位置はその点がやはり絶妙だと思います。繰り返しますが、伝え方で誤解を生まないように彼らは気をつけています。誤解を生ん

だって、笑わせて考えさせればサイエンスのパイが広がるからいいでしょ、とは絶対にならない。なぜなら根底に研究に対するリスペクトがあるから、ですね。

ただ、今でこそ、イグ・ノーベル賞はハーバード大学で授賞式が行われたり、ノーベル賞受賞者が参列する賞となりましたが、最初はリスペクトを持ってやっているということは伝わらなかったんですよ。受けるのが不名誉だとか、受賞を認められないという話もありました。なぜなら学問や研究に対して、ものすごく崇高できれいなイメージを内部も外部の人も持っていることがあって。確かにそれもひとつの側面であるがゆえに、侵害されて馬鹿にされていると受け取られてしまうことも、時にはあるかもしれない。ただやはりそこにはサイエンスの面白さを広げていきたいという想いがある、だからこそイグ・ノーベル賞は、徐々に市民権を獲得して、やっとここまでの認知度になったんだと思います。

—イグ・ノーベル賞にも紆余曲折あったんですね。独特なカルチャーとして育ってきたというか。

少し話はそれますが、先日『PAVEMENT (ペイヴメント)』[17]というバンドのライブに行ってきたんです。そこで、音楽とサイエンスって、カルチャーとしてどんな違いがあるのだろうかと考えてみました。PAVEMENTのライブには、多くの人が集まります。サイエンスも同じように、学会ではたくさんの人が集まる。音楽もサイエンスも、多くの人が集まって盛り上がり、作品が発表されるという意味では同じなんですよ。むしろ、音楽を全くやらない人はいるとしても、学問に全く触れない人っていうのは、ほぼいないは

ずなんですよ。

—国民の半分が大学に進学し [18]、少なくとも人々が卒論を書いていますよね。

僕は洋楽、特にロックミュージックは、今でも大好きなんですよ。ただ結局のところ、カルチャーへの敷居という意味では、ロックミュージックにもそれなりに素養は必要なんじゃないかと思っています。例えば、バンドの一つを小学生に聞かせても、「すごい!」と感ぜられる子はきっと少ないでしょう。音楽を色々聞いてきて、ああいいうのもあれば、こういうのもあると、自らのロックの世界が出来上がってきた時に初めて、受けとることができるというタイプの衝撃があるんです。

学問も同様です。一つの論文を「すごい!」と感ぜるには、衝撃を受けるための知識や経験がなければ叶いません。知識と経験を溜め込められていて初めて「すごい!」と理解できる。やはり、音楽もサイエンスもそこは違わないんじゃないかなと思います。だということになぜ、サイエンスはカルチャーとして見なされにくいのか。サイエンスという言葉が、他の映画や音楽と同じように、あるひとつのカルチャーを表す言葉として、一般的な市民権を得ていないのはどうしてだろうか。一つには、学問の方が、偶然の出会いというのが起こりにくいのだと思います。

音楽には、偶然の出会いってあるんですよ。全く PAVEMENT のことを知らなくても、初めて聴いた時に衝撃を受けるケースがある。学問の方が、その偶然のケースは起こりにくいと感じています。衝撃を受けるには、ちょっとハードルがある。サイエンスにおいては、そのハード

を下げる役割を、イグ・ノーベル賞は担えているのかなと思います。なんだこれ？ と思って元の論文をクリックしてみたら、うわこんなことやってたの、と。イグ・ノーベル賞があったことによって、研究と私たちの間に一段、階段が作られているのかなと思うんですね。

一誤解を生まないためには、わかりやすく正確に伝えることで精一杯になりそうです。我々も、『文化と生物学』についてわかりやすく説明することが目標ではなく、サイエンスとカルチャー双方にリスペクトを持ちながら、『文化と生物学』らしさのある情報、例えばちょっと散歩する時に草が生えてる地面とかを見てみようかなとか、映画に登場する生き物や自然から読み取れる情報が増えてきたなあ、といった「文化」と「生物学」の言葉を繋げてみることで生じる面白いような情感を伝えていきたいと思っています。

僕が大事だと思うのは、イグ・ノーベル賞らしさや、ご説明いただいた『文化と生物学』らしさでもなんでもいいと思いますが、何かと何かのつながりにワクワクする、興味があるという感覚を伝えられるかだと思うんですね。サイエンスコミュニケーション [19] の話になりますが、サイエンスコミュニケーションにおいてよく求められる能力が、「わかりやすく伝える能力」なんです。

注釈

※以下に掲載されている URL は 2023 年 5 月 25 日現在の内容とする。

1. ノーベル賞 (Nobel Prize) : ダイナマイトの発明者として知られるアルフレッド・ノーベルの遺言に基づき、物理学、化学、生理学・医学、文学、平和、経済学の 6 つの分野において、「人類に最大の貢献をもたらした人々」に贈られる賞。 <https://www.nobelprize.org/>
2. イグ・ノーベル賞 (Ig Nobel Prizes) : 人々を思わず笑わせ、そして考えさせるような功績を称える賞。

しかし、これはあくまで一つの方法であって側面でしかない。目的にもよりますが、僕がサイエンスコミュニケーターとして思うのは、例えば研究者が研究のことを話し終わった時に、仮に相手が内容を理解していなくても、でもこの研究者の人、むっちゃくちゃおもしろそうに話してたな、ものすごく研究のこと好きなんだな、と伝えられたら、それはひとつの成功だと思いますよ。

わかりやすく伝えたら、それが伝わりやすい場合も多いかもしれないけれど、はたして伝えるべきはどこか？ と考える日々ですよ。ともあれ、『文化と生物学』がどんな展開になるか、楽しみにしています！

古澤輝由 (ふるさわ・きよし)

立教大学理学部 SCOLA 特任准教授、サイエンスコミュニケーター。大学卒業後、高校で生物教師として教鞭を執る傍ら、音楽ライター、DJ としても活動。2011 年より青年海外協力隊としてアフリカ・マラウイ共和国に赴任。帰国後、日本科学未来館での科学コミュニケーター職を経て、2016 年北海道大学科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) 特任助教、2020 年より現職。イグ・ノーベル賞を紹介する“イグおじさん”として教育番組解説や展示監修、授賞式の日本語配信監修なども行っている。

珍しいものを祝い、想像力を称え、科学、医学、技術への人々の関心を喚起することを目的としている。「優れた科学コミュニケーション」に贈られる「ハインツ・オーバー ヒューマー賞」を受賞。

<https://improbable.com/ig/about-the-ig-nobel-prizes/>

3. アカデミー賞 (Academy Awards) : アメリカ合衆国の映画芸術科学アカデミー (AMPAS) により、映画の健全な発展を目的にキャスト、スタッフの労と功績を讃えることを目的とした映画賞。オスカー賞 (The Oscars) とも呼ばれる。 <https://abc.com/shows/oscars/about-the-show>
4. ラジー賞 (Razzies) : アカデミー賞に対するパロディ映画賞であり、最悪の失敗作を表彰する。ゴールデンラズベリー賞 (Golden Raspberry Award) とも呼ばれる。
<https://www.razzies.com/>
5. マーク・エイブラハムズ (Marc Abrahams) : 1991年にイグ・ノーベル賞を創設し、授賞式の司会を務めている。雑誌『Annals of Improbable Research』(AIR)の共同創刊者および編集者。著書に『This is Improbable』『The Ig Nobel Prizes』など、執筆・編集多数。
<https://improbable.com/whatis/about-marc-abrahams/>
6. モンティ・パイソン (Monty Python) : 1969年英国国营放送BBCで6人のメンバー(グレアム・チャップマン、ジョン・クリーズ、エリック・アイドル、テリー・ジョーンズ、マイケル・ペイリン、テリー・ギリアム)がスタートさせた30分のコント番組『空飛ぶモンティ・パイソン』。“コメディ界のビートルズ”とも称されるその革命的かつ王道の“笑い”は世界的な大反響を呼んだ。のちにスクリーン、ステージ等にも進出、現代コメディの基礎を作った作品として今なお熱心なファンを生み続けている。
<https://www.universal-music.co.jp/monty-python/>
7. Sanders Theater, Memorial Hall, Harvard : アメリカ合衆国マサチューセッツ州ケンブリッジのハーバード大学のホール。国家歴史登録財に登録されている。
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Sanders_Theater,_Memorial_Hall,_Harvard.jpg
8. Williams Jr, L. P., & Newell, K. W. (1970). Salmonella excretion in joy-riding pigs. American Journal of Public Health and the Nations Health, 60(5), 926-929.
<https://doi.org/10.2105/AJPH.60.5.926>
9. Nolan, J. F., Stillwell, T. J., & Sands Jr, J. P. (1990). Acute management of the zipper-entrapped penis. The Journal of emergency medicine, 8(3), 305-307.
[https://doi.org/10.1016/0736-4679\(90\)90011-J](https://doi.org/10.1016/0736-4679(90)90011-J)
10. Yoshizawa, K., Ferreira, R. L., Kamimura, Y., & Lienhard, C. (2014). Female penis, male vagina, and their correlated evolution in a cave insect. Current Biology, 24(9), 1006-1010.
<https://doi.org/10.1016/j.cub.2014.03.022>
11. 2018年9月に北海道大学で開催されたイグ・ノーベル賞の講演会“Research for Laughter, Research for Thinking” 「『研究』で笑い、『研究』で考える」
<https://www.hokudai.ac.jp/terrace/1049/>

12. GARCÍA - HERNÁNDEZ, S., & Machado, G. (2022). Short - and long - term effects of an extreme case of autotomy: does “tail” loss and subsequent constipation decrease the locomotor performance of male and female scorpions?. *Integrative Zoology*, 17(5), 672-688
<https://doi.org/10.1111/1749-4877.12604>
13. Garcia-Hernandez, S., & Machado, G. (2021). Fitness implications of nonlethal injuries in scorpions: Females, but not males, pay reproductive costs. *The American Naturalist*, 197(3), 379-389. <https://doi.org/10.1086/712759>
14. García-Hernández, S., & Machado, G. (2020). ‘Tail’ autotomy and consequent stinger loss decrease predation success in scorpions. *Animal Behaviour*, 169, 157-167.
<https://doi.org/10.1016/j.anbehav.2020.08.019>
15. Solimary García-Hernández and Glauco Machado, for studying whether and how constipation affects the mating prospects of scorpions. <https://improbable.com/ig/winners/>
16. 『Annals of Improbable Research』：毎年6冊が発行される、笑って、そして考えさせられる研究雑誌。 <https://improbable.com/publications/magazine/>
17. PAVEMENT：ペイヴメントは、1990年代に活躍したアメリカのインディーロックバンド。カルト的な人気を博し、彼らの音楽は1990年代後半以降の多くのバンドに大きな影響を与えた。またメジャーレーベルの支援を受けずに幅広い成功を収めた、現代における最初のロックバンドの1つであるとされている。ペイヴメントの成功を皮切りに、大量のインディー・ロック・バンドが独自に成功を収めるようになった。 <https://pavementband.com/>
18. 大学進学率：2022年度の大学（学部）進学率（過去年度卒含む）は56.6%で、前年度より1.7%上昇し、過去最高を更新した。短期大学進学率を含めると、60.4%の高等学校卒業者が大学に進学している。 https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt_chousa01-000024177_001.pdf
19. サイエンスコミュニケーション：科学のおもしろさや科学技術をめぐる課題を人々へ伝え、ともに考え、意識を高めることを目指した活動のこと。研究成果を人々に紹介するだけでなく、その課題や研究が社会に及ぼす影響を一緒に考えて理解を深めることが大切。
https://www.mext.go.jp/kids/find/kagaku/mext_0005.html